

資料 3

都立大島海洋国際高校の成果検証

1、基本情報

課程	全日制（学年制）	学科	国際学科 （海洋国際科）	改編	平成 18 年度
住所	大島町差木地字下原 電話 04992-4-0385		前校名 （母体校）	都立大島南高等学校	

2、生徒数、学級数、教職員数（平成 2 9 年 5 月 1 日現在 単位：人）

学年	学級数	学級定員	生徒数			教職員数	
			男	女	計		
1 学年	2	4 0 × 2	6 2	1 9	8 1	校長	1
2 学年	1 (国際)	4 0	2 7	8	3 5	副校長	3
	1 (海洋)	4 0	2 4	7	3 1	常勤教員	3 0
3 学年	1 (国際)	4 0	2 3	1 5	3 8	職員	1 4 (内常勤 11)
	1 (海洋)	4 0	3 3	7	4 0	船員	1 8

3、類型の設置

類型	類型の目標	関連する資格	関係する進路
国際系 ※報告書策定時 ⇒国際社会	船や寮における集団活動や国際交流を経験することにより、国際感覚豊かなたくましい人間を育成するとともに、日本・地域の文化、国際理解、コミュニケーションを重視した学習により、国際社会のリーダーとなりうる資質・能力を育成する。また、これに見合う、より高度な高等教育に対応できる学力を育成する。	TOEIC 受験 (全員)	4 年制大学への 進学
海洋系 ※報告書策定時 ⇒国際海洋	船や寮における集団活動や国際交流を経験することにより、国際感覚豊かなたくましい人間を育成するとともに、「海洋の保全・利用・再生」に関する基礎学習や操船技術、海洋観測など地球環境保全に貢献しうる知識の習得と課題意識の啓発を行う。また、より高度な海洋に関する高等教育に対応できる学力を育成する。	英 検 2 級 (全 員) 1 級小型船舶 操縦者(全員)	海洋系・理系大 学進学、公務員

4、成果の検証（検証のポイント：都立大島南高等学校学科改編検討委員会報告書（平成 1 7 年 6 月）及びこれまでの検討経過を踏まえ、現状との比較において検証を実施）

検証項目		これまでの取組と成果など	現状における課題や検討の必要性など
教育理念などの検証 ※資料 1 参照		・教育理念の実現に向けて、学校独自に教育内容を工夫して実施	・生徒の将来のキャリア像が明確でないため、国際科として海洋国際教育をどのように実践すべきかが不明瞭
教育課程の検証 ※資料 3－2「教育課程の変遷」参照		・教育理念と生徒の進路希望などを考慮の上、教育課程を少しずつ変更しながら、その時に求められる教育課程を編成・実施	・社会的背景やニーズを検証するとともに、生徒・保護者の希望を踏まえた真に求められる教育課程に見直す必要
設置されている類型の検証		・国際系、海洋系ともに目標の実現に向け、教育課程はもとより、学校行事や部活動、寮生活などを通じて総合的に教育を展開	・国際系・海洋系ともに、生徒のキャリア像を更に明確にした上で類型の見直しが必要
特色ある教育活動の検証	1、新しいタイプの国際教育の実践		
	① 実習船による国際交流を実施 ・国際系国際航海「アジア経済の最前線を学ぶ」（2 学年で実施） ・海洋系海洋調査航海「海洋環境・資源を学ぶ」（2 学年で実施）	・国際系では、航海実習を実施しながら寄港地活動にて現地の高校生などと国際交流を実施 ・海洋系でも、国際航海を行う中において、海洋環境調査、観測、漁撈実習など、効果の高い実習を実践	・類型の在り方に合わせた教育課程編成を検討の上、生徒の具体的なキャリア像に必要な航海内容に見直す必要
	② 国際交流活動の実施 ・海外姉妹校、提携校との連携、航海学習による国際交流、海外研修の実施	・国際航海での寄港地活動、国内における国際港（京浜港等）での寄港地実習などにより、国際感覚の醸成と異文化体験などを実施 ・海外研修では、短期留学や現地校生との実践的交流などを実施	・海外研修は希望する生徒のみへの実施であり、学校全体にどう還元していくかなどの課題
	③ 留学生の受入	・例年 1 名以上の留学生を受け入れ、生徒はもちろん島の住民の方々などと多様な異文化交流を実施	・留学生の受入拡大が困難（受入先との調整だけでなく、受入予算や施設などの受入環境なども含めた課題）
	2、進路・進学指導を重視		
	・学習到達度別授業と到達度チェック・フォロー体制の確立（予備校に行かずに大学への現役合格を可能にする）	・学力スタンダードに基づき、授業⇒予習・復習⇒確認テスト⇒フォローアップというサイクルで確実な学力定着を実施	・基礎学力の定着が十分ではない生徒が存在 ・宅習の効果的な実施方法について更なる検討が必要
	3、全寮制を活用した教育指導		
	・宅習（寮での学習）における夜間チューター制の実施 ・寮生活を通し「誠実・礼節・協力」「自律と自立」の実践的態度を育成	・ハウスマスターと舎監教員により宅習を実践 ・ブリーフェクト（生徒の代表）を中心とした自律活動やハウスマスターによる日常指導により、自律性、協調性、生活習慣等を育成	・宅習による学習効果が見られない生徒や、宅習での学習習慣が身に付いていない生徒が一部に存在 ・生徒への規範意識や社会性の醸成などを生徒に自律的に実施させていくため、更なる効果的な方法を検討する必要
	4、東京海洋大学等との高大連携		
	・大学の講義や実習を本校や大学にて生徒が受講 ・共同研究や観測の実施 ・首都大学東京などとの連携を軸にした高大連携の推進	・東京大学海洋アライアンスや東京海洋大学、首都大学東京生命科学コースなどと連携した実践的講義の実施や大学生との交流などを実施し、より高い教育内容の体験や進学意欲向上などを実施	・大学教授陣と本校教員とが連携した教育プログラムを開発・実施することなどにより、生徒により高い志を育成していく必要
	5、地域との連携協力		
	・自然・歴史・文化及び海洋環境という条件をグローバルな視点から地域をとらえ、住民や地域関係機関、大学などと連携した教育を実践	・島内フィールドワークなどの活動により、大島の自然や歴史、海洋環境などを活用した教育を実践	・地域の課題をグローバルな課題とリンクさせて、教科横断的に研究する活動などを通じ、生徒の主体的な探究活動と地域への貢献を充実させていく必要
入学者選抜、類型希望、進路の状況、生徒・保護者の意識等の検証 ※資料 3－3 及び 3－4 参照		・入学者選抜の倍率回復、希望する進路の実現など	・総合的にデータを検証し、入学者選抜制度、各類型の規模や学科などの制度、強化すべき取組などについて検討する必要